すてきな本たち

～子どもたちとのふれあいの中から～

第 2 回

石井桃子さんの作品は，いつまでも

教文館
子どもの本のみせ ナルニア国
土屋　智子

ナルニア国では、月替わりでいろいろなフェアを行っています。たいていは子どもの本の作家、画家にちなんだものですが、開店から十年近くたち、その数も百近くとなりました。多くのフェアの中にあって、未曾有の大盛況となったのが昨年三月に行った〝「石井桃子さん、一〇〇歳おめでとう！」の催し〟でした。

石井桃子さんは、『ノンちゃん雲に乗る』などの著作、『クマのプーさん』や「ピーターラビットの絵本」シリーズなどの翻訳で有名ですが、それ以外にも日本中に「子ども文庫」が生まれるもととなった、岩波新書『子どもの図書館』や、読売文学賞受賞の小説『幻の朱い実』も著されています。そして、二〇〇七年三月一〇日に、お元気で一〇〇歳を迎えられました。

このフェアは、あまりにも印象が強く、また、石井桃子さんという方が日本の子どもの本にとっていかに大切な方であるかがわかればわかるほど、それを表現する言葉がなく、もどかしい思いに駆られるばかりです。

約一ヶ月のフェア中は、毎日毎日クリスマス並にたくさんの本が売れると同時に、お客さまの熱い思いに触れる日々でもありました。カウンター越しにその本についての思い出を語る方、このために、遠方からいらした方もおおぜいいらっしゃいました。

書店員として何より驚いたのは、店中が石井桃子さんの本で埋め尽くされた光景でした。平台すべてに石井桃子さんの本が並び、どの台も存在感を主張する姿は壮観でした。

私自身、石井桃子さん作の小型絵本『やまのこどもたち』は幼い頃の愛読書でした。山里の暮らしなど知らないのに、読みながらとてもリアルに作品中の子どもたちの遊びをいっしょに楽しんでいました。春、梅の花や松葉でおままごと、夏、高い木に登って降りられなくなったり、深い雪に埋もれた年越しのようすなど、短編映画を見ているかのようによみがえってきます。どうか、今育つ子どもたちも、あの美しい日本語にふれてもらいたい、心からそう願っています。

『**やまのこどもたち**』
石井桃子＝文
深澤紅子＝絵
岩波書店／ 1956年

つちや　ともこ　教文館 子どもの本のみせ ナルニア国店長。公立図書館員、日本図書館協会・児童基本蔵書目録作成委員会（非常勤）などを経て現職。